

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第190号

イザヤ 65:1

平成23年7月29日

パロはヨセフにツァフェナテ・パネアハという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻にした。こうしてヨセフはエジプトの地に知れ渡った……きまんの年の来る前に、ヨセフにふたりの子どもが生まれた。これらはオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが産んだのである。ヨセフは長子をマナセと名づけた。「神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた」からである。また、二番目の子をエフライムと名づけた。「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた」からである。 創世記 41 : 45-52

ヤコブはヨセフに言った。「全能の神がカナンの地ルズで私に現れ、わたしを祝福して私に仰せられた。『わたしはあなたに多くの子を与えよう。あなたをふやし、あなたを多くの民のつどいとし、またこの地をあなたの後の子孫に与え、永久の所有としよう。』今、私がエジプトに来る前に、エジプトの地で生まれたあなたのふたりの子は、私の子となる。エフライムとマナセはルベンやシメオンと同じように私の子にする……彼はその日、彼らを祝福して言った。『あなたがたによって、イスラエルは祝福のことばを述べる。『神があなたをエフライムやマナセのようになさるるに。』』こうして、彼はエフライムをマナセの先にした。 創世記 48 : 3-20

エフライムの子たちは、シュテラフ、その子、ベレデ、その子のタハテ、その子のエルアダ、その子のタハテ、その子のザバデ、その子のシュテラフ。それに、エゼル、エルアダであるが、彼らはこの地の生まれであるガテの人々に殺された。彼らが家畜を奪おうとして下って行ったからである……その後、エフライムは、妻のところに入った。彼女はみごもって男の子を産んだ。彼はその子をベリアと名づけた。その家がわざわざのさなかにあったからである……彼の子はレファフ……その子はヌン、その子はヨシュア。 歴代誌第一 7 : 20-27

日本の神話と聖書に記されているヤコブの子ヨセフの子エフライムの系図には驚くべき類似が見られます。古事記、日本書紀によれば、天照大神（あまてらすおおみかみ）から神武（じんむ）天皇に至るまでの関係を次のように要約することができます。①兄のニギハヤヒの尊（みこと）ではなく、弟のニニギの尊が天照大神に命じられて、三種の神器を携えて「葦原（あしはら）の瑞穂（みずほ）の国《稲が豊かに実り栄える国》」に天降りし、日本の王（きみ）となりました。②ニニギの尊は美しいコノハナサクヤ姫との結婚を姫の父に申し込みますが、長女の醜いイワナガ姫とも結婚させられます。③ニニギの尊には三人の子が生まれ、長男は海幸彦（うみさちひこ）、次男は山幸彦（やまさちひこ）でした。海幸彦は海で釣りをするのが得意、山幸彦は山で狩りをするのが得意でした。④コノハナサクヤ姫の子、山幸彦は兄にいじめられ、ある日、兄から借りた釣針を海で亡くしたことで、海の世界にしばらく身を隠すこととなります。⑤海神の宮に快く迎え入れられた山幸彦は神秘的な力を発揮し、海神の娘トヨタマ姫と結婚します。⑥海神の助けで失った釣針を見つけた山幸彦は、地上の世界に戻り、兄と和解します。⑦トヨタマ姫との間にウガヤフキアエズが生まれ、その後、ウガヤフキアエズには四人の子どもが生まれます。⑧四人の子は、海を渡り、山を越えて、何年もかかって東のほうへ移ります。その間に、三人は力尽き果て、他国へ行き、あるいは、死亡して、東の地にたどりついたのは、四男のカムヤマトイワレヒコの尊だけでした。このカムヤマトイワレヒコの尊こそ、大和（奈良）の地を平定し、橿原（かしはら）に大宮を築き、初代現人神（あらひとがみ）として即位した神武天皇で、一説によれば、紀元前六百六十年の一月一日即位したのでした。神武天皇は日本の皇室の父祖で、今上天皇は百二十五代目という世界でも比類ない長い歴史を誇っているのです。

創世記には、唯一真の創造神ヤーウェとイスラエルの民との契約関係が詳細に記されています。神が、イスラエルの族長アブラハムを召名し、「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなる者としよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者を私はのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」（創世記 12 : 1-3）と約束されたのは、究極的に全人類が暗闇の支配者サタン、罪から解放され、神の祝福、神の御国に入れられるためでした。神はそのために、選びの民イスラエル（アブラハム、その子イサク、その子ヤコブの子孫）を人類史のあらゆる時点で全世界に送り、全世界が真の神を知るように今日に至るまで働いておられます。しかし、罪のゆえに人々は神の働きを見過ごしてきました。まさにキリストの愛弟子ヨハネが語った「この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」（ヨハネ 1 : 10）という目くらましの状態は、西暦一世紀にキリストを拒んだユダヤ人だけでなく、日本をも含んだ全人類の問題なのです。

二十世紀後半から、古代イスラエルと古代神道、日本、皇室との関係がマスコミでも取り上げられるようになっており、イスラエルの族長「ヤコブ（改名後、イスラエル）」と日本神話の「ニニギの尊」との対比、両系図の類似性が

指摘されてきています。以下は聖書に記されているヤコブからヨシュアに至るイスラエルのエフライム族の系図の要約ですが、先に挙げた系図と比較すると細部では異なっているものの、類似は驚くべきです。

①主は、イサクに双子が生まれたとき、兄のエサウではなく弟のヤコブをアブラハムの血筋の約束の子とされましたが、神の預言を自力で達成しようとしたヤコブは、兄と父をだまして長子の特権と祝福を奪い、逃亡します。逃亡中、ベテルでヤコブは、天と地を結ぶ「天の門」のビジョンを見、主ご自身から「**あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される**」という約束を受けました。②「**ヤコブは旅を続けて、東の人々の国**」へ行き、美しいラケルとの結婚の許可をラケルの兄ラバンに願います。しかし、ラバンの策略でヤコブは、ラケルの姉の醜いレアとも結婚させられたのでした。③レアと女奴隷との間に十人の息子たちが生まれた後、主はついにラケルの胎を開かれ、ヨセフが生まれ、しばらく時を経た後、ベニヤミンが生まれました。④父ヤコブの寵愛を受けたヨセフを腹違いの兄たちは憎み、いじめ、ついにヨセフをエジプトへ向かう商人に売ってしまいました。ヨセフは「海」に象徴される異邦人の地、エジプトで奴隷として主人に仕えることとなります。⑤逆境にあっても、エジプトで「**主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た**」主人に愛されたヨセフは、主の力によってパロの重大な夢の解き明かしをしたことから、パロに次ぐ地位が与えられ、エジプト全地の支配者に昇格させられ、エジプトの祭司の娘アセナテが妻に与えられました。神からの賜物によって、政治力、指導力を発揮して、ヨセフは長期にわたる飢饉に賢く備えました。⑥カナンで飢饉が起こり、エジプトに穀物を買いに来た兄たちは許らずも大臣ヨセフと対面し、恐怖におとしめられますが、神を恐れるヨセフの「**あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました**」との赦しで、究極的に和解に至ります。⑦ヨセフにはエジプトで二人の子が生まれました。父ヤコブは臨終の床でこの孫二人を自分の子どもとみなし、相続に与らせ（したがって、ヨセフは他の兄弟の二倍分の相続を継承）、次男のエフライムには長男マナセをしのぐ祝福を与えました。⑧エフライムには三人の子、シュテラフ、エゼル、エルアデが生まれましたが、次男、三男が殺されるという悲劇を経て、四男ベリアが生まれました。後に、このベリアの血筋から、ヌンの子ヨシュアが生まれ、ヨシュアは、指導者モーセの死後、イスラエルの民をカナンの地に導き、神がイスラエルに与えると約束された地を平定したのでした。イスラエルの民がカナンの地に定着後は、エフライム族はユダ族と並んで、イスラエルの十部族を統率していくことになったのでした。

日本神話と聖書の話とを比べると、ニニギの尊はヤコブ、コノハナサクヤ姫はラケル、山幸彦はヨセフ、トヨタマ姫はアセナテ、ウガヤフキアエズはエフライム、エフライムの四男の子孫がイスラエルの地を平定したヨシュアになります。そこで、大和の地を平定した神武天皇をヨシュアに見立てることができるなら、日本の皇族のルーツは、東に向かって移動したエフライム族ということになるのです。しかし、天皇が、古神道で「祭司王」の立場に置かれていたことを、古代イスラエルの王との共通性とみならず見解は、明らかに聖書的ではありません。むしろ、先月号と先々月号で考察したように、祭司王、現人神という概念は異端的な要素で、真のイスラエルの王は、モーセの律法でそのような異端に染まることがないようにと厳しく警告されていました。神権国家イスラエルではヤーウェご自身が王として臨まれたのですが、王に支配されている近隣の異邦人諸国を羨んだ民の強い要請で、人間の王がイスラエルに君臨することが許され、神の御旨を行うダビデの血筋の理想的な王、メシヤが究極的に神の民を支配することが預言されたのでした。神ご自身が指名された初代王はダビデで、イスラエル王国は王職、祭司職、預言職の三権分立で始まりました。しかし、ソロモンの背信のゆえに、イスラエルは南朝ユダと北朝エフライムの二つの王朝に分裂し、前者はモーセの掟に従う善王によって宗教改革が繰り返され、軌道修正しながら支配されたのに対し、後者は最初から完全に掟を逸脱する王たちによって支配され、ついにアッシリヤによって滅びたのでした。後者の王たちは祭司、神殿奉仕者として神が任命されたレビ人を罷免、追放、祭司職を乱用し、ヤーウェと同時に異端の神々を崇拝する混成宗教を国内にはびこらせて、配下の民を墮落させたのでした。他方で、南朝もついに背信のゆえにエルサレム神殿と国を失い、バビロン捕囚の憂き目に遭いましたが、預言通り七十年後に本国帰還が許され、ヤーウェの約束を信じ続けた「イスラエルの残りの者」ユダヤ人は、エルサレムに神殿を再建することができました。その後もユダヤ人の背信は続き、列強の支配下に置かれてきましたが、まだ国家としての自治権を維持した状態で王国は続いていたのでした。紀元前六～四年頃、ローマ帝国から買収でユダヤ人の王の地位を獲得したエドム人ヘロデ大王の死後、大王の息子たちがユダヤを支配しました。しかし、その一人、暴君アケラオがユダヤで受け入れられなかったことは、ローマが占領政策の一環として狙っていた機の到来となります。アケラオは、西暦七、八年ごろ王位を降ろされ、ローマの総督に置き換えられることになったのです。それは、弱小国家イスラエルにとって、力の遷移、国家権力剥奪を意味する屈辱的な出来事でした。そのとき以来、ユダヤ最高議会のサンヒドリンは死刑判決権を含む司法権を奪われ、完全にローマの占領下に置かれることになったのです。サンヒドリンの議員たちは、生死に関わる自分たちの権利が剥奪されたことを知ったとき、頭を灰で、身体は荒布で覆い、「私たちは災いだ。王権がユダから離れたのに、ついにシロは来なかった！」(バビロニア・タルムード)と嘆いたのでした。ユダヤ人たちはヤコブを通してユダ族に語られた預言の言葉が成就しなかったと思ったのです。しかし、神のご計画は測り知れず、王権は確かにユダから離れたのでした、「シロ(メシヤ)」は来たのでした。

古代神道に反映されているイスラエルの混成宗教は、古代日本にヤーウェ信仰がもたらされたことの証しなのです。